

敗戦後の 学校の復興に 全力で



菅野博幸氏（左側）と西出俊亮事務局長

私が、この話を伺ったのは昨年（平成17年11月15日）菅野さんのクラスが、クラス会を開催された際に福井大学を訪問して下さり附属図書館で懇話した時でした。その時ご本人から何気なくポツリと話された事に、私は驚きと感動を覚えました。これはご本人には追憶のひとつでしょうが立派な美談です。敗戦後の昭和21年という時代がそうさせたとは思いますが、卒業生の中にこんな行動をされた方がおられたことを是非知って頂きたく痛感し、工業会誌に掲載することと致しました。そして、この度その機会が巡ってまいりました。それでは今日は菅野さんを大学の附属図書館の一室にお迎えして、当時のお話を伺います。

－ 対 談 －

西出：本日はお忙しいところ時間を割いて大学までご足労頂き有り難うございます。

昨年のお聞きしたお話が私の心に深く刻み込まれましたので、今日は少し突っ込んで、当時の実情や体験談、思い出などを聞かせて頂けたら有り難いのですが。

菅野：何と云っても60年前の昔話で私も80歳の傘寿を超えてしまい記憶もおぼろげなことが多く、呆けて忘れてしまったこともあります。間違っていたらごめんなさい。それに今までにご登場されたお三方とは違い、優れた技術者でも経営者でもありません。今までのサクセス・ストーリーではありませんので、これでよいのか心配しています。

西出：あの太平洋戦争で完全に壊滅した福井大学（当時は前身の福井工業専門学校）を復興したい一念で、学生が一丸となって働き、一部では画期的な方法で資金を稼ぎ、学校へ寄付された事実は現在では想像もできません。今日の基盤はその時に出来たのかもしれませんが。今日は宜しく願いいたします。

PROFILE



菅野博幸氏

〈 略 歴 〉

- 1925年 福岡市生まれ
- 1947年 福井工業専門学校電気科卒業
- 1947年 大沢商会入社 営業課配属
- 1953年 南海放送（株）
- 1960年 同社テレビ放送部長
- 1969年 マルトモ（株）工場長
- 1985年 清水商事（株）企画部長
- 2000年 上記会社退職

文学の里松山から福井へ

西出:九州の福岡のご出身とも書いていますが、また、お父さんは医者と伺っていますが。

菅野:生まれたのは福岡市の中心で天神という所です。小学校は大名小学校、中学は旧制の福岡中学（現在の福岡高校）です。両親は四国松山近郊の出身で、大正2年から福岡市天神で歯科医を開業していました。父は豪快緻密な性格で、昔風の「医は仁術」を頑なに守ると共に、家業のほかに、福岡及び九州の歯科医師会会長を務め、保険制度の確立や現九州歯科大学の設立などに東奔西走の多忙な日々をおくっていたのを子供心に記憶しています。

西出:この福井大学の前身である福井工専を受験された動機、初めて福井へ来られた時の感想などは如何でした。

菅野:親父の仕事を見て育ちましたが、当時は現代とは違い、医師や歯科医師が大変少なく、当時人口30万人弱の福岡市で、中心の天神周辺にも医師・歯科医師合わせて開業医は全部で4～5件だったようですし、総合病院は中心部から離れた九州大学医学部付属病院くらいしか記憶にありません。そのため父は年中殆ど休日がなく、働き通しでした。そんな過酷な仕事で体を痛めたのでしょうか、昭和18年3月、53歳で亡くなりました。私が福井へ入学した前年です。母と私は一段落してから父母の郷里松山へ転居しました。生前父は医業の後継は自分で決めなさいと言っていました。一度は父の母校である現在の東京歯科大学に入学していました。しかし、医師は自分には不適と判断し、退学していました。そして福井を受験しました。

福井を選んだのは、親戚にこの学校を卒業した先輩がいて、福井は素晴らしいと会う度に感化されていた



昭和21年秋 東尋坊に全員遊ぶ

のも原因でした。それに当時は技術系の専門学校に行かないと兵役に付くことが決められていたのも理由でした。それから漠然とですが、これからの時代は電気と判断し電気科を選びました。

昭和19年4月、入学のために丸一日かけて松山から福井駅に降り立ちました。その日は私が生まれ育った九州や四国とは違い、どんよりとした灰色の雲が空を覆った北陸の街との出会いでした。初めての歓迎は肩を濡らす細かい春雨でした。しかしこの街にはきっと日本に残された最後の自由があると信じ、不思議に寂しさは覚えませんでした。

西出:その後の福井での生活や市街について、また当時の学生生活気質などについてはどうですか。

菅野:福井は城下町としてのしっとりとした落ち着きと優雅さを持つ人情豊かな街で、また他国でも区別なく温かく迎えてくれる街で、学生に対しても殊の外親切であり、感謝の気持ちは現在でも変わりません。

入学した直ぐの頃に九州出身者は集まれと先輩から呼び出され、何かと案じていましたら、「九州人はすぐに喧嘩をする傾向があるが、この土地では短気を起こすな、福井の人は辛抱強く我慢強く善人だ。それを見習え。」と一発檄を飛ばされました。以来私は九州人魂を学校やクラスの行事に発揮しようと考えました。先輩は檄の後で、九州出身者を「だるま屋」に連れて行き、「ここが学生憧れの“だるま屋”だ。この別嬪さんを泣かすようなことは許さん」と言って店内を回りました。確かに店員さんは美人ばかりで、学生も何人かうろうろしていました。

入学して幾日か過ぎると自然に親しい仲間ができ、放課後の夕暮れには紺紺の着物に木綿袴をはき、棕櫚の鼻緒の高下駄を履き、腰に薄汚れた手拭をぶらさげ、城跡の公園や市街地を学生歌を高歌放吟しながら闊歩したものでした。そこには今では味わうことが出来ない古き良き時代の学生生活が残っていました。私は、工専校電気科に入学し、一緒に学ぶ同級生となった記念に、



真空管回路の図案を描いた手拭

腰からぶら下げる手拭を作る計画を立てました。お金がないので安いべらべらの人絹の生地に真空管回路の図案を描き、1カ月程で100枚完成し配布しました。

60年経過した今日、わずかに2枚小森君が大切に保管して残っていました。貴重な遺産です。こんな学生生活は多分全国でも少なかったでしょう。戦時色が強い東京などの大都市は軍の厳しい監視下にあり、ゆとりのある学生生活などは無理だったでしょう。しかし昭和20年を迎えると福井も軍や警察の監視が厳しくなり、学生が若い女性と散歩でもしていると、警察に「非常時の時代に何事だ、非国民行動だ」と逮捕され、一晩留置されるようになりました。友人の1君もその犠牲者の一人でした。

昭和20年4月我々は学徒勤労動員令という臨時法律のもと、全科の学生が各科ごとに数人ずつ分割され、近畿・中部・北陸の軍事施設、運輸施設、通信施設、研究施設などに動員されて行きました。終戦がなければそのまま軍に徴兵されていたでしょう。文科系の学生はすでに徴兵されていましたから。私達は関西出身者を中心に10名が鈴木先生に引率され、兵庫県明石の山奥にある無線電気通信局に配属されました。仕事は雑役でした。そこでは米軍の日本向けのラジオ放送が聴こえ、何月何日何時に日本の〇〇市を空襲するから、善良な市民は別の所へ避難して下さいと通知してくるのです。しかもそれは正確なのです。それを何故市民に告知して犠牲を少なくしないのか、次第に義憤を感じるようになりました。しかし軍はそれを秘密にしました。私は松山市の空襲予定を米軍放送で知り、密かに松山の母に知らせました。皆に知らせると、スパイ容疑者として留置されるので、連絡は大変でした。終戦後母がこのことを親しい人に告げていたことをそっと私に話してくれました。

かくて終戦となり、皆は動員先から自宅に帰りました。私は四国の松山ですから瀬戸内海を船で渡らなくてはなりません。ところが米国進駐軍が全ての船の航行を暫く禁止していました。そのため自宅に帰ることが出来ず、やむなく広島県の三次市に帰る親友の山崎君の家に厄介になることになり、8月17日明石を出ました。船の航行解除が出たのは、たしか8月20日だったと思います。その日私は山崎君宅を出て、汽車で広島市に着き、駅から四国行き船が出る宇品港まで広島市を横断して約1時間歩いて行きました。その時まざまざと広島市内の現状を見て原子爆弾の恐ろしさを痛感しました。原爆投下から2週間目の風

も途絶えた夏の暑い昼下がりでした。

帰宅してまず心配したのは、これから一体どうなるのだろうかということでした。終戦の混乱の中で不穏な日が続く毎日でしたが、ただひたすら学校からの連絡を待ちました。これは今にして思えば校舎や設備が壊滅していた学校に籍をおいていた全ての学生が抱いていた不安だったと思います。そして待望の連絡が来ました。9月中頃だったと思います。10月から再開予定だから出席せよとのこと。嬉しかったですね。

しかし、喜んで来てみると、福井の街は戦災で焦土と化し、学校は講堂を残すだけで壊滅し、木造ながらも整然と建っていた教室や実験室はその面影さえ残ってはいませんでした。

復興資金獲得委員会の設立と 学生演劇団の結成

西出：菅野さんから、昭和21年の末から22年にかけて、相当の復興資金を集めて寄付されたと聞きましたが、どのようにして集められたのか、学校側の対策はどうだったのかお聞かせ下さい。

菅野：学校が壊滅してはまともな授業や実験は出来ません。それに終戦の疲弊した混乱期に政府や文部省に資金を求めてもどうにもなりません。壊滅した学校は全国至る所にあります。それに政府は先ず国民が生きていくことへの資金を優先します。また国は極貧状態です。そこで我々の学校は先ず我々で再建しようとの気運が学生の一部の中から芽生え始めました。その気運は次第に膨らみ、学校側も全面賛同し一緒に実現に努力しようということになりました。しかし学生の中には無関心の者も多かったので、まずチーム作りから始めることになりました。そして学校側と各科の学生から熱意のあるものが参画して委員会を結成し方法や時期などについて討議することからはじめることになりました。そして私は何故か電気科の委員に選任されました。それから毎日のように夜遅くまで「何時何処で誰がどんな方法で実施し目標はどうするのか」を討議しました。まとめるのは大変で、口論になったこともありました。

そして結果として知能労働・肉体労働・社会労働の報酬で稼ぐことになりました。時期はそれぞれで、ずれることも仕方ありませんでした。

- ①海水浴場でのかき氷販売
- ②土木工事場での作業

- ③三角富くじの街頭販売
- ④ラジオの修理
- ⑤戦災の片付け作業
- ⑥老人の物品購入補助
- ⑦その他

多種多様な労働報酬を資金に収める方法が検討され、何人かがグループとなって街へ出ていきました。

そんな中まとまった資金を獲得する方法として私は学生演劇によるチケット販売を計画しました。これは当時としてはユニークで奇抜なことで、成果も不安でなかなか賛同が得られず、結局全校で10名程が参加してくれました。相談の末に時期は昭和21年の10月頃から22年の初め頃として、手分けして会場の設定と確保に奔走しました。こうして会場と日程を決め、後に引けない状態を確立しました。それから私は色々な脚本や文学書の中から演目を山本有三作「盲目の弟」と有島武郎作「ども又の死」と決め脚本を書き、舞台装置案を設定しました。それから脚本をガリ版印刷し、部員を集めて配役を決め個々に知らせた皆に納得してもらいました。私も演出と主役兼務ですからさあ大変です。お金を払って見に来て頂くのですから、感動を提供しなければなりません。全員練習に継ぐ練習です。ああでもない、こうでもない議論しながら何日も何日も何度も何度もバラックの臨時教室などに集まって夜遅くまで稽古を続けました。

入場料は1円だったと思います。前売りは多くの関係学生や部員に依頼し、ポスターは手書きで何枚も作りしました。

かくして公演初日を武生で迎えました。晩秋の薄ら寒い夜でした。それからは福井、鯖江、丸岡など市内から町村各地で公演しました。時間は1時間半程度だったと思いますが、どこも驚くほどの満員で、学校再建資金運動を理解して頂いたから、そして娯楽が少ない時代だったからかもしれません。芝居の途中で客席からすすり泣きや応援の檄が飛び交い、舞台には「おひねり銭」が投げ込まれ、「頑張れ」の掛け声もかかりました。公演が終わり夜遅く凍つく吹雪の中を新聞紙で顔を覆いながら田舎道を知人の後援者の家までとぼとぼ列をなして行ったこともありましたが、しかし部員全員がその成果に満足し、どんなに苦しく辛くても不平不満の声は最後まで一人としてありませんでした。

今にして思うと、私が最初に福井に来て感じたように福井の人は優しく深い理解の持ち主だったことに間違いはなかったと嬉しく思っています。

売上金はその都度学校に納めていましたが、まとめれば3,000円ほどはあったと思います。これも古いことで細かい金額などは確かとは言えません。間違っていたらごめんなさい。

それと、演劇部で中心的な大活躍をしてくれ、最後まで終始一緒に行動してくれた繊維化学の友人には常々会いたいと思っております。また、女役を男子学生が演じているのを見て、福井高女から賛助出演の温かい申し出もありました。また、後日鯖江の知人を介して当時の名優長谷川一夫の劇団への勧誘などもありました。

西出：当時の3,000円の貨幣価値を現在に換算するために、菅野さんと同級の保本さんが同窓会誌「追憶」に記載されていた当時の出納簿を参考に算出してみました。

	昭和22年当時	平成18年	倍率
パン1個	20銭	120円	600倍
お風呂	1円	330円	330倍
散髪代	4円60銭	3,800円	826倍
新聞代	25銭	120円	480倍
はがき	15銭	50円	330倍

上記のようになると思います。当時と比較して現在は何倍なのか平均値をだしてみますと昭和22年物価では713倍になります。これを昭和21年の物価と比較すると1,075倍になります。当時は物価が、月々は勿論日々上昇していたことがわかります。

そこで寄付金額が約3,000円とすると、約214～322万円となります。大変な高額の寄付だと思えます。

菅野：これは演劇部の獲得資金ですが、他のグループがどれ程獲得したか私は分かりません。いずれにしても学生が本来の使命である勉学を3～4カ月離れ、母校の為、ひいては自分達の為に努力したことは、戦後という過酷な時代の一頁の出来事とはいえ、大学の歴史には残しておいて頂きたいと願っております。そして二度とこのようなことのないことを願います。

西出：75歳までの永い年月お仕事をされたと聞きましたが、その目標と処世訓を教えてください。

菅野：私は75歳の高齢まで現役で働くことが出来ました。それも健康だったお蔭だと思います。それと転機に非才な私を迎えていただいた企業があったからだ感謝しています。私は社会に出たとき漠然とですが人生目標を立てました。それは福岡中学時代恩師

だった竜先生から「男は一人前になったら人生目標を持ち、それに向かって努力することが大切だ」と常々教えられていたからかもしれません。それはまず健康を維持し、当時人生50年と言われた現役世代に70歳過ぎまでは働きたいと思っていました。そしていつしか75歳を迎えた時、これからは自分たち夫婦だけの為に残りの人生を過ごそうと決め、現役を引退しただけのことです。私は昭和22年(1947年)福井工専を卒業し、社会に出て、大阪・東京で商社に勤めましたが、25歳の時結核にかかり退職しました。都市生活で食料も満足に摂れず、圧死者が出るほどの満員電車で通勤し、働き続けて体力に限界が来たのでしょう。当時は珍しいことではありませんでした。帰郷して2年間サナトリウムで療養し、全快し退院した翌日から新聞社・放送局で働き、60歳からは友人の総合商社で職務経験を致しましたが、今思えば仕事はどれも何処も面白く楽しかったと記憶しています。

昭和22年卒業と同時に大阪の商社に就職した時代は、外地から復員軍人さんが続々と帰国し、国内の大きな企業は戦災で壊滅したところが多く、若者が町にあふれ、就職難の時代でした。すぐに就職できたのは幸運でした。しかし月給の90%は食料調達資金でした。そんな中で私は漠然と人生目標を立てました。それは特別に高いものではなく平凡なものでした。早い自立、結婚。そして子供に恵まれ、元気に育ち、好きな仕事に就職し独立、それぞれ素敵な伴侶を見つけて結婚し、孫に恵まれる。自分たち夫婦は健康を守り歳を重ね、私は当初の70歳くらいで引退し、孫の成長を楽しみながら、夫婦で趣味と旅に老後を過ごす。目標は最も一般的なものですが、最も幸せな目標と信じていました。そして多少の紆余曲折はあっても、妻と二人の子供達の努力に助けられて次々と実りました。幸せな人生と言えるでしょう。

ところで私の座右の銘など他人様に言えるものではありませんが、日頃考えていたことは「人生は経験の連続であり、経験は進歩でありたい。即ち人生は進歩の日々でありたい。」であります。どんな仕事も貴重な経験ととらえていました。おかげでどんな仕事も常に楽しかったのかもしれません。

そして人生観は「人生はひとつのアート」だと思っています。その出来ばえや価値は最後に自分と家族で決めるものと信じています。

西出: 同級生からの菅野さんへの思い出話を一寸披露していただけますか。

—小野田重雄さんから—

私は歌を歌うのが大変好きでしたが菅野君は歌が上手かったのを憶えています。それから下級生にも人気があり、学校祭の時に下級生が担ぐ神輿(実は実験台)に乗り、体全体に赤チンを塗って雷姿でパレードをした菅野君と、新入生歓迎会で「俺は腐っても鯛だ」と自己紹介した伊藤 泰君の二人は、印象が深かったようで、卒業後にクラス会をすると下級生から「雷さんと鯛さんは元気ですか」としばしば聞かれました。



昭和21年10月3日工専第23回創立記念祭 電気科全員仮装行列

—徳原 哲郎さんから—(同級生会誌“追憶”から抜粋)

昭和20年、学徒動員前のある日、何人かと一緒に福井の佐佳枝劇場に旅役者10人位の芝居を観に行ったことがありました。その役者の中に17、8歳の可愛らしい娘がいました。笑顔も素敵でした。私と同じように菅野君も思ったのでしょうか。動員前で余裕時間が無い時でしたが、菅野君はファンレターを出しました。やがてその娘から返事があり、私も見せてもらいました。何処の方言か知りませんが「〇〇したでよ、〇〇すら」とたどたどしい文章が平仮名で書いてありました。おそらく満身に学校にも行ってないのでしょうか。それが学生さんから手紙を貰ったので嬉しくて一生懸命に返事をかいたのでしょう。

数日して私も菅野君もそれぞれ動員で福井を去りました。その後のことは知りませんが、その踊り子の心情を思うといじらしく、可哀想な気持ちです。遠い日の出来事ですが。

—松並 貞雄さんから—(同級生会誌“追憶”から抜粋)

昭和22年春、卒業して大阪の逓信省部局に就職が決まり、勇躍大阪に行きましたが住むところが無く、困った挙句すでに大阪の商社に就職している菅

野さんに連絡して厚かましく彼の会社の寮に同居を頼んでみました。彼は嫌な顔も見せず、直ぐにOKを頂きました。大都会の生活に戸惑う私は、菅野さんの適切なリードで安心して楽しい生活を送ることが出来ました。私が勤務先の寮に変わって暫くして菅野さんは東京に転勤されました。

重松学校長からの感謝の一言



第四代校長 重松 倉彦

西出：菅野さんの在学中の功績に学校長から一言お礼があったと聞きました。

菅野：卒業の時重松校長から呼び出しがあり、何事かと心配しながら校長室に向向きました。当時の学校長は太田代先生から重松倉彦先生に代わっていて、恐る恐る訪ねる

と、あにはからんや、口頭で一言「復興に頑張ってくれて有り難う」とお礼を言われました。当時のことですから形式ばった賞状とか金一封などはありません。しかし嬉しかったですね。今も誇りに思っています。ほかの復興委員の方も呼ばれたかどうかは分かりません。

西出：同級生と菅野さんとの思い出話の中で何かひとつ披露して頂けますか。

菅野：薄れていく記憶の中にも色々なことがあります。青春時代ならではの話をいたしましょう。

先程も話しましたが、市内の「だるま屋百貨店」の店員さんは採用が厳しく、俗に言う才色兼備の教養と知性豊かな美しいお嬢さんしか入社出来ないという評判でした。それだけに学生の羨望の的でした。戦後昭和21年の夏頃だったと思いますが、当時はひどい食料難でしたが、だるま屋さんでは夕食時に薄い雑炊を何人分か食べさせてくれました。下宿生活の私達学生は常に空腹状態でしたので、それを食べるに長い行列に幾度も並んで「だるま屋」通いをしました。何度も行くうちに、店の人も顔なじみにもなりましたが、親友のF君が一人の美しく清楚な店員さんに好意を抱くようになりました。若者なら誰もが憧れるようなお嬢さんでしたからF君の気持ちは当然と言えるでしょう。しかし自分では告白する勇気が無く私に仲介しろと頼んできました。二つ返事で引き受けた私はF君の気持ちを幾度もその娘さんに伝えました。しかしいつも微笑むだけで反応がなく、F君からは「まだかまだ

か」と急かされ、困った私はある日学校の帰りに今日こそはと決めて一人で店に行きました。ところがその日彼女から一通の封書を買ったのです。しめたと思っていると「これは菅野さんへです」と恥ずかしそうに小さな声で言って、別のところへ行ってしまいました。どきどきした気持ちで下宿へ帰り、しっかりと握っていたため温かくなっていた封書をポケットから出し、封を切りました。ところが中に手紙は無く“百人一首かるた”の中の一首の下の句「昔はものを思はざりけり」の札が一枚入っただけでした。その札の上の句は「逢見ての後の心にくらぶれば」の恋の和歌です。私は天女の声を聞いたようでした。その後私はF君に「駄目だ、諦めよ…」と告げ、親友F君への義理を通し、その日から彼女に会いませんでした。F君には黙っていました。辛い日々が続きました。突然灯った淡く儂い恋情を捨てました。それにしても、あの一枚の札に心情を託し、そのために百人一首の他の上下の199枚の札を無駄にしてまで恋情を伝えたかった彼女の純愛を思うと、60年近く経過し忘れかけた昔日のことが、とぎれとぎれに甘く思い出されます。まるでドラマの一節みたいな事実です。残酷な青春時代のひとこまでした。

西出：最後に現在在学中の後輩学生に残したいことはありますか。

菅野：私たちは戦前戦後という永い日本の歴史の中でも特筆すべき苦難の時代に在学していました。現在とはあらゆるものが全く違います。自由に発言ができる時代で、時には倫理観さえも違ってくるのではないかと思います。それだけに「物言えば唇寒し秋の空」で老人の愚痴や戯言となる心配がありますのでただ一つだけ言わせて下さい。

「福井大学は本当に素晴らしい大学です。誇りと自信を持って学んでください。」



昭和22年3月15日 電気科六回生卒業記念